

## 栄吉 令和7年1月度特別作品

城のある町

栄吉

城のある町に育った。そのせいだろう、今でも城が好きだ。もともと、最近では、城の跡や遺構などに、より関心を持って

いる。拙宅の近くに城の跡があると聞き、早速、講座に参加した。場所や規模などから考えると、それは戦のためというより、今日の言い方をすれば、集会所に近いものだったらしい。そうだとしたら、どのような人が集まり、どんな会話をする城(集会所)だったのか。興味は尽きない。

色変へぬ松や故郷の一里塚

この奥に八幡御座す秋の蝶

連休の朝の静寂に耐鶺

短日の古本市の明りかな

短日や影に負けじと急ぐ道

玉砂利に抱つこ叶はぬ七五三

落葉降り見上ぐる空に天守閣

落葉踏む小さき足音続きをり

冬紅葉橋の向うへ続きたる

散りたての木の葉差し込む文庫本

### 《作品鑑賞》

暁子

城や城址、小さき者の成長、季節の移ろいとそれを愛でる心……。栄吉さんは衰えぬ関心と細やかな観察で、幅広く句作をされているようです。

色変へぬ松や故郷の一里塚

城は滅んでも城に続く一里塚の松は美しいままです。色変へぬ松は、懐かしい故郷であり、節を曲げぬご自身なのでしょう。

玉砂利にだつこ叶わぬ七五三

着飾っての宮参り、本人はたぶん三歳。草履では歩きにくい参道で、だっこをしてほしいのです。いじらしく一生懸命歩く姿、それを見守る祖父の姿が目に見えかひます。孫の成長を寿ぐ気持ちも伝わってきます。

散りたての木の葉差し込む文庫本

公園での読書中でしょうか。身ほとりに散ってきた新しい木の葉が捨てがたく、文庫本に挟みました。行く秋を静かに楽しんでる心のゆとりを感じる一句です。